

5.12



Nursing Day

令和 7 年度看護職の体験談 忘れられない看護エピソード

5 月 12 日は「看護の日」です。

富山県看護協会では「看護の日」にちなみ、平成 20 年度から「忘れられない看護エピソード」を募集し、今年度は 81 件の応募がありました。

作品はいずれも、看護の本質とそこに携わる人々の懸命な思いが伝わる温かなメッセージにあふれています。

ご応募いただきましたエピソードの中から、受賞した 6 作品をご紹介します。かけがえのない「看護」という役割を多くの方に知っていただくきっかけになれば幸いです。



「看護の日」キャラクター

かんごちゃん

受賞者

最優秀賞	長坂 百合	(富山県立中央病院)
優秀賞	木村 優子	(市立砺波総合病院)
	里見 美佳	(富山県立中央病院)
特別賞	岡村 有美江	(富山県済生会富山病院)
	清水 彩月	(黒部市民病院)
	藤野 冬奈	(富山県リハビリテーション病院 ・こども支援センター)

公益社団法人富山県看護協会



沈黙の先にあるもの

富山県立中央病院 なが さか ゆり
長坂 百合

看護師になりたての頃、患者さんや家族との会話の途中でふと訪れる沈黙の時間が苦手だった。沈黙の間に患者さんや家族は何を考えているのだろう、どう声かけしたらいいのだろうと戸惑うばかりで、気まずくて自分がそこにはいけないような気がしていた。しかし、ある出来事が私の考えを変えた。

緩和ケア病棟に異動になりがん患者のAさんに出会った。Aさんは症状緩和のため麻薬を使い、夜間は鎮静剤を使って一時的な鎮静を行っていた。目覚めると体中に激痛が走るというAさんは、新顔の私をジロリと一瞥^{いちべつ}すると「ちゃんとやり方聞いてきて」と、初めはケアに応じてくれなかった。どうにか信頼されたいと先輩にAさんのケア方法を教わり、面会に訪れた妻と一緒に病室に入っては会話を重ねる日々。それでも会話が途切れると、私はすぐに病室を出てしまうのだった。悲嘆が強く涙目の妻と、思うように症状が緩和されずにイライラするAさんとの重苦しい沈黙に耐えられなかった。

全身状態が悪化していく中、Aさんは夢と現実を行き来する症状がみられるようになった。ある日、妻と病室にいたAさんは宙を眺めぼんやりとしていた。妻は泣いていて、私はただただ傍にいることしかできず長い沈黙の時間が流れた。沈黙を破ったのはAさんの穏やかな声だった。「今、一緒に門をくぐったよ」と妻に言った。次に私に向かって「あなたも一緒だよ」と言うAさんは幻覚の中の話をしているようだった。妻はぽかんとした表情で私を見てクスッと笑った。緊張した空気が解け、Aさんの穏やかな様子に二人で安堵した。その後Aさんは自分から私にケアを頼んでくれるようになった。

私は以前よりも沈黙の時間が苦手ではなくなった。ただ傍にいてその場の空気を共有し、沈黙を経て初めて打ち明けられる思いや分かり合える何かがある。患者さんと家族の緊張や不安を和らげることができる。そのことを人生の大切な時間を使って教えてくれたAさんに今でも感謝している。



その人らしさを

知ることの大切さ

市立砺波総合病院 きむら 木村 ゆうこ 優子

3年前、私は大腿骨頸部（太ももの付け根の骨）骨折術後の70代Aさんの担当になった。Aさんは1人暮らしで自動車運転や自炊もする自立した人だった。転倒したところを弟さんに発見されて救急搬送されている。

Aさんは手術後、怒りっぽくなる症状や認知力低下があり介護に対し抵抗がみられた。私は怒りっぽい苦手なタイプだと思っていた。精神科の介入で内服治療が開始され怒りっぽさは治まったが、むせやふらつきなどがみられ内服調整をしながらリハビリを続けた。そして退院に向けて弟さんを交えて話し合いを行った。

Aさんは性格的に自分のことは自分でやりたい人で、長年1人暮らしをしてきた自負があり、絶対に自宅に戻りたいと希望した。しかし弟さんは毎日の訪問が困難なこと、転倒を繰り返す可能性があることから施設入所を希望された。

私はAさんの思いを聞いていくうちに親しみを覚えるようになった。どのように1人暮らしをしてきたのか、また自分が望むように元の生活に戻りたいなど話を聞いて理解することができた。しかし自宅退院しても火を扱う危険性や自動車運転に不安が残ると病棟スタッフから意見が出た。私は、自らが望む人生の最後を支えるアドバンス・ケア・プランニング（ACP）といわれる時代に安全ばかりを優先して本人の意思を尊重しないのは違うのではないかと感じた。何度も話し合いを行い、1人暮らしに必要な資源やサービスを調整した。退院後は、弟さんが見守りや買い物の際の運転を行い、調理はIHを使用することとなり、なんとか自宅退院が可能となった。

退院後、再診やコンビニでAさんにお会いした。Aさんは軽トラを運転しておられた。「あの時は世話になったね。ありがとう。なんとかやっとりよ」と私のことを覚えていてくださった。Aさんの生き方を理解し、本人の希望に沿った退院支援につなげられて、私も幸せな気持ちになった。



あなたがあなたらしく

生きる選択肢

富山県立中央病院 さとみ みか 里見 美佳

喉頭^{こうとう}がんをわずらう 80 代の A さんが呼吸状態悪化で入院となり、本人の同意を得て緊急気管切開術が実施された後、担当看護師として「喉頭^{こうとう}がんの治療にどう向き合うか意思決定をする支援」に携わりました。私はこれ以上の病状悪化を防ぐためにも治療を勧めましたが、本人は「治療はしない！家に帰る！」とこれ以上の治療は望まず、家族も本人の意思を尊重していました。A さんは「困ったことがあったら相談に乗って欲しい」とお願いして、自宅へと退院していきしました。

退院後は自転車に乗ったり好きな物を食べたりして入院中よりも元気で生き生きとした表情がみられました。「細いカニューレはある？」など、本人や家族からの相談に乗ることもありました。2 年が経過した頃、カニューレ挿入が困難となった時のことです。「あんたにカニューレを入れてもらえんが？」と言われ、できないことを伝えるとがっかりした表情をされました。このことをきっかけに「何かアドバイスができるのではないか」と、看護師が一部の診療行為ができるようにする特定行為研修の受講を決め、気管カニューレの挿入ができる長期呼吸療法を取得しました。

その後 A さんは痛みにより食事量が低下したため、緩和ケア病棟への入院や高カロリー輸液などの提案をしましたが、筆談で「家におる、ここがいい」とはっきり自身の思いを伝え、自宅での生活を継続されました。退院後 3 年の月日が経過した頃、A さんの訃報を受けました。

A さんが治療をしないと決断したとき、私を含め医療者は「正直 1 年も持たないだろう」と誰しもが思っていたましたが、A さん自身「治療しない方が自分らしく生きられる」と常々話しておられたとおり、生き生きとした 3 年間を過ごしていたなと思います。

A さんとの関わりを通して私自身の看護観は変わり、「あなたがあなたらしく生きる選択肢が治療をしないことであるならば、それは間違いなく選んでいいよ」と言えるようになりました。A さんありがとう、もう少し看護師を続けていきます。



リレーでつなぐ

自宅での看取り

富山県済生会富山病院 おかむら 岡村 ゆみえ 有美江

「The End にしてほしい」亡くなる 2 時間前に言った父の最後の言葉である。この言葉には最期まで天命を全うした父の思いが込められており、感謝の言葉も含まれているような気が今でもしている。

孫が産まれてから、趣味の写真を再開した父。「もう一度行ける時に 1 本の大楓の木を見に行きたい」とよく言っていた。行けるうちにという言葉が少々気になりながらも、家族で大楓まで旅行した 1 週間後、母と私は父の予後が長くないと告げられた。

1 人放心状態の私とは正反対の母。父のもとにひょこっと現れて、2 人並んで座る姿は、誰が見ても父のそばにいたいのだというオーラを放っていた。

「自宅での看取り、あなたは夜勤勤務しているし無理でしょ」と言われるかと落ち込む私に、医師は「パルス療法をしましょう」と言ってくれた。看護師は「今日も夜勤？お疲れさま。どこの病院も忙しいよね～」と励ましてくれた。父の自宅退院に向けた戦いが始まった。

治療の効果があらわれて今なら帰宅できるという体調になり、急きょ退院カンファレンスが開かれた。ケアマネジャーさんの計らいか偶然にも顔なじみの介護タクシーさんが快く引き受けてくださった。角を曲がり自宅に到着すると、父が急こう配の階段を登ることができるよう、医療器メーカーさんまで待機してくれていた。この時ばかりは目頭が熱くなり、涙がこみ上げてきた。

往診医の方も来てくれ、静かだった実家がにぎやかになり、父と母の周りには人の温かさであふれていた。

それから 1 週間は母と孫と私のリレー方式で父の せいしき 清拭や洗髪を行った。父は絶賛してくれ、母も父にしてあげられる関わりが増えて、そばにいられる安心を実感しているようだった。私自身にとってもこのひとときがかけがえのない時間となった。

夜勤明けの夜、実家に泊まることにしたその日。たどたどしい呼吸の中、確かに父は私たちに「The End にしてほしい」と言ったのだ。動揺することなく、父のそばにいられたのも、父の最期に付き添ってくれた訪問看護師のおかげである。父や母、そして私の体をさすってくださり、寄り添うことの大切さを教えてくれた。



患者の家族になって

学んだこと

黒部市民病院 しみず 清水 さつき 彩月

私が看護師になって3年目を迎えた頃、初めて患者家族として看護師や医師に関わった。祖母の体調が優れず、訪問看護を利用することになったのだ。家族は私に対して「家にも看護師がいるから安心」と話してくれた。しかし日を追うごとに弱っていく祖母の姿を見て、私には何もできないのではないかと不安でいっぱいになった。

訪問看護師が初めて家を訪ねてきたとき、私を含め家族全員が安心したのを覚えている。笑顔であいさつをして、祖母の体に優しく触れる手が印象的だった。祖母のケアが終わった後、私たち家族に対して「不安なことや悩んでいることはありませんか？」と声を掛けてくれた。私は少しでも祖母と家族の支えになりたい、しかし自分にできることが何か分からず悩んでいることを伝えた。訪問看護師は親身に私の思いを聞いてくれた。その時に掛けてもらった言葉が私の心の中に今でも残っている。

「辛いときはそばにいてもらうだけで少し楽になるものだから、あなたがそばにいて手を握っているだけでおばあちゃんはうれしいと思う。大好きなお孫さんだから、特別なもしなくても今はただ一緒にいてあげてね」私の手を握りながら話してくれた訪問看護師の温かさに救われ、暗く沈んでいた心が軽くなった。

この日から私が目指す看護師像がはっきりと形になった。患者とその家族の心に寄り添い、支えることができる看護師だ。看護師4年目になった今でもあのとき訪問看護師からもらった言葉を忘れたことはない。患者が不安を感じているときは可能な限りそばにいる時間を増やし、思いを傾聴できるように関わっている。患者に笑顔が戻ったり、少し楽になったと言ってもらえたときには看護師としての役割を果たすことができたのではないかと心が温かくなった。これからも患者家族になって得た学びと当時の思いを胸に、この先関わる全ての患者とその家族を温かく支えることができる看護師を目指して努力したい。



自分らしい生活を送りたい

Aさんに寄り添って

富山県リハビリテーション病院・こども支援センター

ふじの ふゆな
藤野 冬奈

看護師になって半年が過ぎた頃、私が初めて受け持った患者Aさんから「もう家に帰ります。連れてってよ!」と大声で訴えられる毎日だった。脳出血を発症し、状態は安定したが体の左側の麻痺、視界の左側が認識しづらい「左空間無視」が残った。帰宅願望・焦燥感が強く、入院していることを何度も説明するが、認知症もあるため理解が得られず、押し問答の日々が続いた。

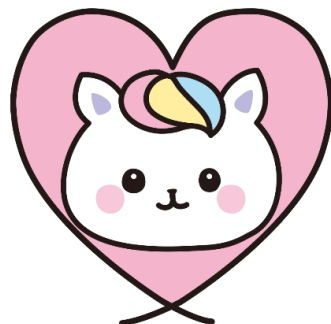
Aさんは車いすから急に立ち上がることもあったため、転倒の危険性を考慮して車いすにベルトを装着して対応していたが、かえってストレスになり、不安の要因となっていた。「ねえ、お願いだからこれ外して! 家に帰って自分のことをさせてよ!」と病棟中に声が響いた。抗不安薬や不眠時薬を内服するも、日に日に不安と帰宅願望が増す一方であり、私は頭を抱えていた。

しかし「なんとかAさんの気持ちに寄り添いたい」「何かできることはないか」と思い、多職種で今後の対応を話し合った。Aさんの「帰りたい」という思いは当然だ。その思いを尊重し、家族と外出訓練に行くことを計画した。

外出に同行した私はその状況に驚いた。「あれはひ孫の写真。かわいいでしょ」「飼っていた犬の名前はコロちゃんっていうの」そこには入院生活では見られなかった笑顔があり、今でも忘れず目に浮かぶ。「ちょっとでも帰れてうれしかった。ほんとうにありがとう」と私の手を握って話す姿を見て、外出訓練が実現できて良かったと思った。また、Aさんの日常生活動作(ADL)向上に伴い車いすは使用しなくなり、ベルトの装着がなくなった。「いつもありがとうね。またお願いします」と言われ、別人のように表情や口調が穏やかになっていた。

Aさんとの関わりを通して、リスクばかりに目を向けるのではなく、「一時的にでも帰りたい、入院生活の中でも自分らしい生活を送りたい」という患者さんの思いに寄り添い、思いを実現させることは、患者さんの精神的安定にもつながるのだと学ばせてもらった。

5月12日は



看護の日

看護の心をみんなの心に

「看護の日」

毎年5月12日は「看護の日」

その日を含む日曜日から土曜日までが

「看護週間」です。

看護の心、ケアの心、助け合いの心は

今後の社会を支えていくために大切です。

「看護の日」はこうした心の認知・普及のため、
近代看護を築いたフローレンス・ナイチンゲールの
誕生日にちなんで制定されました。



【主催】富山県／公益社団法人富山県看護協会

【発行】公益社団法人富山県看護協会 富山県ナースセンター

〒930-0885 富山市鶴島字川原 1907-1

TEL 076-433-5251 FAX 076-433-5281

